# 究人案内

きわめた先に見えるもの

## スタンダップ・コメディアン

# 究極の話芸 米で磨く

欧米で盛んなスタンダップ・コメディーは、1人でステージに立ち、観客を笑わせる。日本の漫談に近いが、風刺を利かせた〝毒〟も含むネタが多い。米国でこれに挑む柳川朔さん(26)は「マイク1本で観客と対峙し、自分の視点を笑いに変える究極の話芸」と話す。

大阪大生だった2014年、米国で活躍する日本人コメディアンを知って心引かれ、渡米。シカゴの劇場などで腕を磨き、年間100本以上の舞台に出るようになった。前から表現に関わる仕事を望んでいたが、自らネタを書き、演出し、俳優でもあるスタイルは「天職かな」とほほ笑む。

例えば戦争をテーマに米国を皮肉るとしたら、先の戦争で米国に負けた国の「日本人だからこそ表現できる笑いがある」と考える。そんな「自分にしか見えないものを自分の言葉で表す」のが醍醐味だが、面白くなければコメディーとして成立しないので笑いの質は何より大事。「シンプルだが難しい、奥深い世界」と言う。

米国や日本にとどまらず、活動開始から5年弱で世界12カ国の舞台に立ってきたが、国によって観客の反応はさまざまだ。その国をモチーフとした映画や本で予習するほか、現地のバーを訪れて、今問題に感じていることや日本の印象を聞くといった「事前準備」がネタ作りに欠かせない。

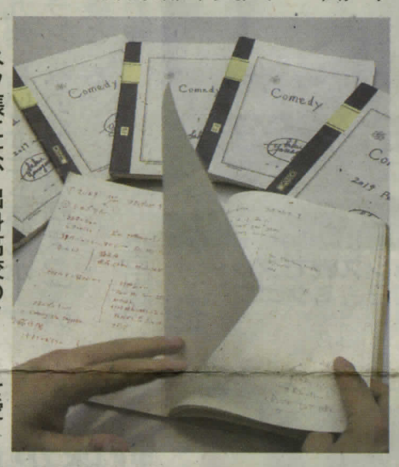
米国の長寿コメディー番組「サタデー・ナイト・ライブ」のレギュラーに日本人として初めて名を連ねることが将来の夢。「米国で活躍することで知名度を上げ、日本でスタンダップ・コメディーが根付くきっかけにしたい」と力を込める。

＝おわり

マイク1本でコメディーというアートに挑む柳川朔さん（大阪市中央区）

舞台衣装は端正なスーツ。「毒を吐くのであれば、品を保ちたい」と、オーダーメードで用意している（東京都中央区）

観客が本番中に議論をふっかけてくることもあり、それにどう応じるかという即興性も求められるという（大阪市中央区）



ネタ帳には、出身高校のノートを愛用。今でも高校の購買部を訪れ入手しているという。「一度だけ別のノートに浮気したんですがしっくりこなくて。もはや手放せません」（東京都中央区）

2018年11月に開かれた国際大会で入賞し、各国代表のコメディアンと写真に納まる柳川さん（右から2番目）＝米国・シアトル（本人提供）

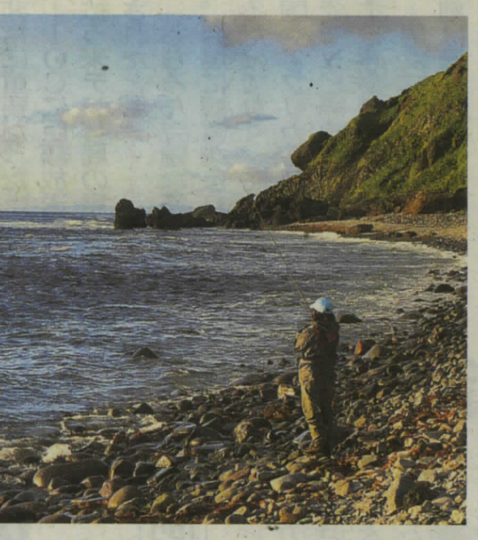
街中でも人間観察を欠かさない。「人々の反応や立ち居振る舞いをストックし、ネタに昇華させます」（東京都中央区）

## 魚と人のおつきあい〈8〉

### マス

奥山 文弥

北海道の先端に位置する知床半島。国内屈指の大自然と呼ぶべき場所で、野生生物の宝庫です。魚たちも多く、海に流れ込む小河があります）。サケの仲間は産卵が近くなると餌を食べなくなるので釣りにくいのですが、海ではまだ元気いっぱいで、ルアーやフライいます。東側へも車でアクセス可能ですが、道がなくなる相泊港より先へは船で行くしか手段がなく、行ける人数が限られています。釣りもさることながら



知床は、世界自然遺産の中でダイナミックな釣りが楽しめる（北海道羅臼町）

## NEWSな言葉

世界でこの1週間に起きたさまざまなニュースをめぐり、各国首脳や著名な人物による重要で印象に残る発言を、日本語と英語で振り返る。

## 「遊び」に潜む「学び」

響育の現場から 小笠 直人 ⑦

## 「写真漬け」になる3日間

「写真甲子園 シャッターガール moment」